

研究区分	教員特別研究推進 地域振興
------	---------------

研究テーマ	自己導尿に関する YouTube®動画の検討と自己導尿指導動画作成				
研究組織	代表者	所属・職名	看護学部・助教	氏名	佐藤 理乃
	研究分担者	所属・職名	国立長寿医療研究センター 長寿医療研修センター研修開発研究室・室長/ 摂食嚥下・排泄センター 高齢者下部尿路 機能研究室・医師/泌尿器外科・医師長	氏名	西井 久枝
		所属・職名	社会医療法人寿人会木村病院 泌尿器 科・部長/福井大学学術研究院医学系部 門看護学領域 基盤看護学・特別研究員	氏名	青木 芳隆
		所属・職名	全国土木建築国民健康保険組合 総合 病院 厚生中央病院 看護部・看護師	氏名	若松 ひろ子
		所属・職名	キッコーマン総合病院 泌尿器科・医長	氏名	鈴木 基文
		所属・職名	看護学部・准教授	氏名	成瀬 早苗
	発表者	所属・職名	看護学部・助教	氏名	佐藤 理乃

講演題目	自己導尿に関する YouTube®動画の特徴 ～2020年4月以前の動画と2020年以降5月以降の動画の変化～
研究の目的、成果及び今後の展望	<p>尿路あるいは膀胱機能の障害により、自らの力で排出することが困難な場合に、膀胱あるいは代用膀胱に溜まった尿を排出するために、カテーテルを挿入する手技を自己導尿という(日本排尿機能学会、2020)。本邦では56,433人の自己導尿患者が存在するが(厚生労働省、2019)、患者が一旦自己導尿の手技を習得したあと、医療者による評価がされていない現状がある(Hagen, 2014)。このような現状において、Social Network Service(以下、SNS)の動画は、アクセスが容易であるため教育や動機付けを促進するための患者にとって重要なツールであると報告されている(McMullan, 2006)。しかし、SNS上の動画は患者を含む誰もが医療情報などを提供および共有できるが、どのような内容の動画が存在しているか明らかにされていない。</p> <p>これまでに、我々の研究チームでは2020年5月までに患者らよりアップロードされた自己導尿に関するYouTube®動画の実態を調査し(佐藤、2021)(中村、2021)その特徴とニーズを明らかにした。</p> <p>今回の研究の目的は2020年5月から2024年3月までに公開された動画を再度スクリーニングし、特徴とニーズを明らかにすることである。</p> <p>研究方法は、YouTube®のサイトにて「自己導尿」のキーワードにて動画を検索し、動画再生回数100回以上であり、本研究目的に沿った動画を対象とした。経年変化による特徴を明らかにするために、2020年4月以前の動画と2020年5月以降の動画を比較した。</p> <p>結果は、2020年4月以前の患者作成動画は5本、総単語数は3516語、単語頻度は高い順から「カテーテル」「導尿」「使う」の順位であった。2020年5月以降の患者作成動画は3本、総単語数4891語、単語頻度は高い順から「導尿」「カテーテル」「思う」の順であった。2020年4月以前の動画と、2020年5月以降の動画において単語頻度の高かった「カテーテル」と共起関係にあった単語について、共起ネットワーク図による分析でみていくと、2020年4月以降の動画は、自己導尿カテーテルを使用した患者の経験や思いに関連する単語が共起関係にあった。その一方で、2020年5月以降の動画では「尿」「起こす」「感染」「消毒」という単語が共起関係にあり、尿路感染への言及がされていた。</p> <p>2020年4月以前の動画調査時点では、患者らの自己導尿に関する経験や思いが強調されている特徴があった一方で、2020年5月以降の動画は尿路感染への言及がなされていた。経年変化とともに、患者発信の自己導尿動画数が増えていくにつれ、YouTube上で自己導尿の大変さや経験・思いを共有するという目的から、自己導尿を継続していくために注意すべき尿路感染に言及しているという特徴が明らかになった。</p>